

令和7年度第1回屋久島世界遺産地域科学委員会 ヤクシカ・ワーキンググループ
及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議について(報告)

1. 開催日時

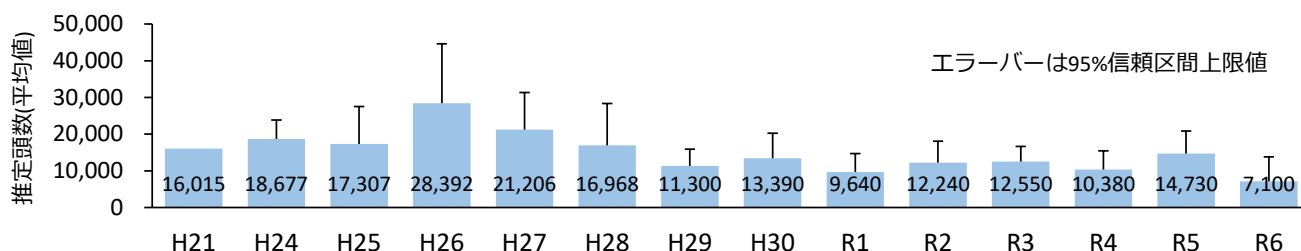
令和7年7月7日(月) 14:00～17:00 屋久島町役場議場(やくしまホール)

2. 議事概要

(1) ヤクシカの生息状況等について

■ 報告の要点

- ・R6 の糞粒調査による推定生息密度は、前年度と比較して増加地点が 10 地点、減少が 26 地点で全体では減少。西部地域を除き、全域的に密度は低く抑えられているが、東部に新たに高密度部分が出現。(鹿児島県)
- ・糞塊密度は昨年度より増加した箇所が多く、特に西部から南部にかけて継続して高密度。(環境省)



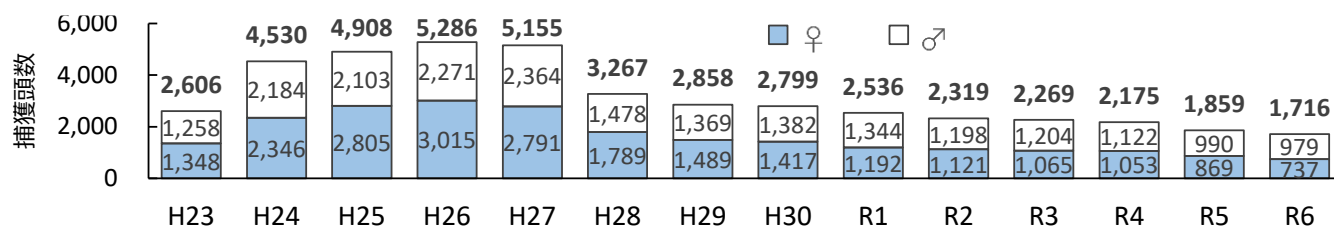
■ 主な意見

- ・国有林での捕獲数が R6 に減少に転じており、今後の変化を見ていく必要がある。

(2) 捕獲等の被害防止対策について

■ 報告の要点

- ・R6 年度のヤクシカ捕獲頭数は 1,716 頭で前年度の 92%。(林野庁)



- ・ヤクシカによる R6 年度農業被害額は 550 万円と昨年度の約 2.5 倍に増加。特にタンカン、ポンカンの被害が多い。(鹿児島県、屋久島町)
- ・R6 年度指定管理鳥獣捕獲等事業による捕獲は船行、鍋山林道で目標頭数 70 頭として実施。計 42 頭捕獲し達成率 60%。(鹿児島県)
- ・R15 年度の目標個体数を 4,500 頭とすると、令和7年度は 1,612 頭の捕獲が必要である。(鹿児島県)
- ・シャープシューティング体制による計画捕獲は R7 年度もカンカケ林道を想定。給餌手間の軽減と早期の地点的誘引を目的として、新たに塩ビパイプ給餌器を給餌箇所に設置予定。(環境省)

■ 主な意見

- ・SFTS について、和歌山県では動物の陽性率がヒトの陽性率に関連しているという報告もあり注意が必要。別の県ではダニ媒介性感染症が観光影響を与える風評被害をもたらすと懸念されていた。ガイド等も含めてダニへの対応について注意していくべき。
- ・狩猟による捕獲と専門技術者による管理捕獲は役割分担を今後進めていくことが必要。狩猟者の年齢構成等の現状を踏まえ、狩猟者に頼るのではなく、専従の捕獲者を確保していく必要がある。
- ・ヤクシカのセメント質年輪による年齢査定は難しい。今後も継続されるのであれば年齢の情報となるセメント質年輪、歯の摩耗、歯の萌出交換状況をつき合わせて見ていくことを検討いただきたい。
- ・タヌキによる被害が増えていく可能性があれば、捕獲方法や捕獲者の確保等、タヌキ対策も考えていく必要がある。
- ・SFTS はタヌキからも感染するため、捕獲従事者の衛生管理も徹底していく必要がある。
- ・昨年は森の果実の実りが少なかったため、ヒヨドリの被害増加に影響したのではないかと。
- ・ガジュマルとアコウの実について、最近オキナワイチモンジハムシが発生している。これが果実の実りに影響している可能性もある。
- ・台風 10 号は風景を変える程の影響があったため、野生動物による農業被害の増加に影響している可能性がある。
- ・捕獲目標のシミュレーションについて、年毎の推定生息頭数の変動によりブレが大きくなるため、注釈が必要。また、階層ベイズモデルを活用すると、ブレが少なくなる。捕獲目標設定について精度を上げる取組を期待したい。

(3) 森林生態系の管理目標及びその他植生モニタリング等について

■報告の要点

- ・R7 年度の植生の保護・再生手法の検討調査は、カンカケ 200m・400m・700m、ヒズクシ、中間 4、中間前岳下の植生保護柵と半山と川原の萌芽枝保護柵で実施予定。（林野庁）
- ・R6 年度の森林生態系管理目標の現状把握・評価については、上記植生保護柵と東部地域の植生垂直分布調査箇所、及び環境省の固有植物種等の調査箇所で開催予定。（林野庁）

■主な意見→特になし。

(4) 特定エリアの対策(西部地域)について

■報告の要点

- ・R6 年度の西部地域における計画捕獲では、新たな罠を追加し、計 4 基使用した結果、64 日間の作業で 24 頭と過去最大頭数と並ぶ捕獲ができた。（環境省）
- ・R7 年度も引き続き 4 基の罠を使用し、7 月から 3 月にかけて 5 回程度の捕獲を実施予定。また、周囲のヤクシカの警戒心を高めるのを防ぐため、空気銃の活用も予定。（環境省）
- ・冬季（12 月、1 月）に栄養状態が回復するのはヤクシカの特徴。生理学的にはシカが減る要素が見られない。温暖な気候ゆえ皮下脂肪、腹腔内脂肪を蓄える必要がないのもヤクシカの特徴。
- ・今回分析したヤクシカにおいては SFTS の陽性個体は確認されなかった。シカ体内でウイルスを増やすことはなく、感染することもおそらくないが、タヌキ等食肉動物はウイルスを増やし、感染もさせる。

■主な意見

- ・シカに付いたダニからのウイルス検出事例もあったはず。シカから感染しないだろうと軽視しない方がよい。
- ・SFTS の感染リスクから、集落に出てきたシカを優先的に捕獲する等の対応をした方がよい。
- ・コウモリの捕獲に使うアカメガシワトラップがシカに食べられるので誘引効果を調べ、捕獲に活用頂くとよい。
- ・西部のシカ糞の DNA からは春にアコウがかなり増える。イヌビワよりもアコウの選好性が強いかもしれない。
- ・しかし、イヌビワの良い点として、継続的に伸張し、常に新しい葉があることが挙げられる。

(5) モニタリング調査項目(侵略的外来生物等の増減や分布変化による生態系への影響)について

■報告の要点

- ・アブラギリ分布について、H23 年度の状況との変化を見るため R6 年度に継続調査を実施。H23 年度に調査した 618 箇所のうち、同地点での確認が 269 箇所、消滅等が 162 箇所、調査未実施が 187 箇所。また、420 箇所で新規に確認し、全体的には拡大傾向。
- ・オキナワキノボリトカゲやタヌキ等の外来生物についてもモニタリングに加えることを検討しており、対象種や調査内容について議論が必要。

■主な意見

- ・外来昆虫について、オキナワイチモンジハムシは 20 年前から増加し既に屋久島に蔓延（在来種か要確認）。
- ・タヌキは、2000 年頃に環境省がセンサーカメラで調査しているはず。まず過去のデータを整理した方がよい。
- ・タヌキの根絶は現実的ではなく、どんな影響があるかを見極めつつ、どの程度の密度に抑えるかの検討が必要。
- ・タヌキについては、生態系影響だけでなくワンヘルスの視点でも重要。ノネコも SFTS に関わってくる。
- ・タヌキの食性を見るのもよい。タヌキは糞が集めやすいので、研究しやすい。
- ・世界遺産地域である西部地域のアブラギリについては、少なくとも真剣に考えていく必要がある。
- ・アブラギリは県有地のエリアの生育も多いため、鹿児島県でも対策をお願いしたい。
- ・アブラギリについては大学院生が分布モデルを作っている。モデルでは、気温とヤクシカ密度が影響。
- ・西部地域で永続的にアブラギリが増えていくことはない。ヤクシカオナガカエデ等の在来種の更新に注目すべき。
- ・タヌキを放獣した人へのインタビューによると、最初に導入された頭数は 8 頭（性別不明）とのこと。
- ・生態系への影響については、研究を公募するとよい。屋久島への新たな研究者の呼び込みにもなる。

(6) その他

■主な意見

- ・国立公園の公園計画の見直しの取組について進捗はどうか。
- 現在の屋久島国立公園の公園区域の主要部分は山岳部であるが、今回の公園計画見直しでは低地照葉樹林の重要性や愛子岳周辺の国立公園特別保護区および遺産地域がむき出しになっている箇所等を対象に、国立公園の区域拡張や地種区分の変更等を想定し、国立公園としての資質があるかなどの現地調査を実施している。また、検討にあたっては森林管理局、屋久島森林管理署等とも相談しながら進めている。進捗状況については会議でも報告していきたい。